

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：32717

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K11561

研究課題名（和文）青少年スポーツ指導者を対象としたアンガーマネジメントプログラムの開発

研究課題名（英文）Development of the anger management program for youth sports coaches

研究代表者

渋谷 崇行（Shibukura, Takayuki）

桐蔭横浜大学・スポーツ科学研究科・教授

研究者番号：30288253

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の主な目的は、指導者の暴力行為の発生と予防に関わる理論的枠組みの検討及び測定尺度の作成、指導者の暴力行為の発生機序と予防因子の検討、指導者の暴力行為の発生を防ぐアンガーマネジメントプログラムの開発であった。検討の結果、6下位尺度（「無気力なプレー」、「自分勝手な言動」、「指示指導に対する不満の態度」、「物事に取り組む姿勢の欠如」、「消極的なプレー」、「規範意識の欠如」）18項目によるコーチの怒り喚起場面尺度が作成された。また、怒りを喚起する場面状況と失敗に対する態度及び体罰に対する態度との間に関連性があることが推察された。さらに、理論モデルに基づき介入プログラムを作成、実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題は、我が国のスポーツ界が掲げている「暴力行為の根絶」に向けた科学的な取り組みである。コーチの怒り喚起場面尺度が作成されたことにより、暴力行為の発生要因の一つとして考えられる怒り感情の表出がどのような場面状況で生じるのかを定量化することができ、コーチの自己理解に役立つことが指摘される。したがって、コーチのアンガーマネジメントの実践力が高まることが大いに期待されている。今後は開発された介入プログラムが暴力的指導により活動停止処分を受けたコーチに対して適用されることも検討したい。更生プログラムとしての意味合いを持つことから、リスクマネジメントにおける再発防止策を提案することにつなげたい。

研究成果の概要（英文）：The main objectives of this study were to examine a theoretical framework and create a measurement scale for the occurrence and prevention of violent behavior by coaches, to examine the occurrence mechanism and preventive factors of violent behavior by coaches, and to develop an anger management program to prevent violent behavior by coaches. As a result of the study, a scale of situations that arouse anger in coaches was created, consisting of 18 items in six subscales ("lethargic play," "selfish behavior," "dissatisfied attitude toward instructions and guidance," "lack of enthusiasm for things," "passive play," and "lack of awareness of norms"). It was also inferred that there was a relationship between situations that arouse anger and attitudes toward failure and attitudes toward corporal punishment. Furthermore, an intervention program was created and implemented based on the theoretical model.

研究分野：スポーツ心理学

キーワード：アンガーマネジメント 青少年 指導者 ハラスメント 介入プログラム コーチ

1. 研究開始当初の背景

青少年スポーツ活動における指導者の暴力行為は大きな社会問題となっている。例えば、2012年に大阪市立高校のバスケットボール部員が、顧問からの暴力や理不尽な指導を苦にして自死するという事件があった。青少年の人間形成という教育的な意義が大きく期待されるスポーツ活動において、指導者の暴力的指導は許されざる行為である。2013年に日本体育協会をはじめとしたスポーツ関係団体は、「スポーツ界における暴力行為根絶宣言」を発し、我が国のスポーツ界から暴力を根絶するという強固な意志が表明された。しかし、その実現には、まだ至っていないとはいえないのが現状である。

暴力行為への対応策の一つとして、怒り感情をコントロールする「アンガーマネジメント」の効果が注目されている(渋谷, 印刷中)。また、今後の指導者育成では、スポーツの意義や価値を理解するとともに、アンガーマネジメントの実践力も含めた指導者自身の「人間力」を高めることの重要性が方針として示された(日本スポーツ協会, 2017)。

欧米ではこれまで、主に選手を対象としたアンガーマネジメントに関わる研究が行われており、その成果は介入プログラムの立案や実施という形で表されてきた(Steffgen, 2017)。しかし、プログラムの目的は競技場における選手のパフォーマンス発揮にあり、指導者の暴力行為に焦点を当てたものではなかった。一方、我が国では、選手に起因するストレスが指導者の怒り感情を導くことが指摘され(Shibukura, 2016)、アンガーマネジメントへの関心は高まりつつあるが、その実践や研究は緒に就いたばかりである。また、スポーツ以外では、企業や教育機関でアンガーマネジメントプログラムが行われているが、その内容や効果検証においてはエビデンスに欠けるという問題点もある(石田, 2018)。

このようなことから、指導者の暴力行為の根絶に向けた科学的な取り組みとして、指導者を対象としたアンガーマネジメントに関わる研究を理論的、実践的に行うことにより、アンガーマネジメントプログラムの開発と実用化を図ることが重要な課題であると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、指導者の暴力行為の根絶に向けた科学的な取り組みとして、暴力行為の発生機序と予防策を理論的、実践的に検討することを通して、指導者を対象としたアンガーマネジメントプログラムを開発することを目的とした。具体的には、指導者の怒り感情と暴力行為に関わる実態把握、指導者の暴力行為の発生と予防に関わる理論的枠組みの検討および測定尺度の作成、指導者の暴力行為の発生機序と予防因子の検討、指導者の暴力行為の発生を防ぐアンガーマネジメントプログラムの開発を行った。

3. 研究の方法

(1)指導者の怒り感情と暴力行為に関わる実態把握

文献調査

検索方法: CiNii, SPORT Discus 等のデータベースを利用する。

調査内容: 国内外の青少年スポーツ活動における指導者の暴力行為等の実態。

面接調査

調査対象: 指導者と選手各 20 名程度(小・中・高校年代の地域クラブや部活動)。

調査内容: 青少年スポーツ活動における指導者の暴力行為、怒り感情、予防因子等。

質問紙調査

調査対象: 指導者と選手各 100 名程度(小・中・高校年代の地域クラブや部活動)。

調査内容: 青少年スポーツ活動における指導者の暴力行為、怒り感情、予防因子等。

(2)アンガーマネジメントプログラムプロトタイプの実行

調査対象: 一般社会人 130 名。

調査内容: 職場の人間関係、職務満足度、職務関与・動機づけに関する内容。

調査時期: 2020 年 6 月から 7 月まで。

実施期間: 2 日間 9 時間

(3)柔道指導者の怒り感情が表出する場面状況の因子構造

調査対象: 幼児, 小学生, 中学生, 高校生, 社会人を指導対象とする柔道指導者 150 名。

調査内容: 柔道指導者の怒り感情が表出する場面状況 32 項目。

(4)コーチの怒り喚起場面尺度の作成

調査対象: 小学校・中学校・高等学校・大学・社会人などのスポーツ指導に当たっているコーチ

360名。

調査内容：怒りを喚起する場面状況，失敗に対する態度，体罰に対する態度，怒りの表出方法。

(5)指導者の暴力行為の発生機序と予防因子の検討

調査対象：小学校・中学校・高等学校・大学・社会人などのスポーツ指導に当たっているコーチ351名。

調査内容：怒りを喚起する場面状況，怒り感情。

(6)指導者の暴力行為の発生を防ぐアンガーマネジメントプログラムの開発とその評価

プログラムの作成：理論モデルに基づき介入プログラムを作成した。

プログラムの実施：介入プログラムをおよそ3団体（小・中・高校年代の地域クラブや部活動）の指導者に対して実施した。

プログラムの効果検証：介入プログラムの効果を介入前，中，後の複数回における測定結果に基づいて検証した。

4. 研究成果

(1)指導者の怒り感情と暴力行為に関わる実態把握

実態把握調査を行い，これまでに発生した暴力行為を理解するとともに，怒り感情の表出過程や予防因子を検討した。文献調査では，最近20年間に青少年スポーツ指導の現場で起きた指導者による暴力事案を概観した。調査内容は発生時期，県名，種目名，出来事，指導者の行為，暴力事案の結果（選手側，及び指導者側）等であった。また，面接調査では，イングランドフットボール協会のDr. Andy Caleに英国の虐待やハラスメントの実態について情報提供を頂くとともに，アンガーマネジメントを含むコーチ向けの教育プログラムの必要性について意見交換した。さらに，観察調査では，イングランドフットボール協会のコーチ向けプログラム「The FA Safeguarding Children Workshop」に参加した。そこでは以下の内容が取り上げられた。Build on best practice, Recognise signs and identify what behaviour causes concern, Identify the actions to take and who can help, Develop your action plan for change. これらの実態把握調査により次年度以降の研究を進めて行くうえで貴重な資料が収集された。

(2)アンガーマネジメントプログラムプロトタイプの実験

試行的な実践研究によって，スポーツコーチ向けのアンガーマネジメントプログラムの立案や効果検証の計画に向けた具体的な知見が得られることになった。

(3)柔道指導者の怒り感情が表出する場面状況の因子構造

検討の結果，3因子が抽出された。第1因子は「周囲に迷惑をかける行動」で，広く他のスポーツでも大切にされる所属する集団の規律を乱したり，責任感のない行動や態度があったりなど，周囲に迷惑をかける行動がある場面状況であった。第2因子は「未熟なプレー」で，集中力や向上心が欠けていたり，消極的であったりなど選手の未熟なプレーがある場面状況であった。第3因子は「礼儀に欠けた振舞い」で，柔道で特に大切にされる内面と外面が揃った礼儀に欠ける振舞いがある場面状況であった。柔道指導者は，これら3つの因子が含まれる場面状況で怒り感情を表出していることが分かった。また，広くスポーツ指導者を対象とした調査では尺度作成に向けた項目収集が行われた。396個のデータがKJ法を用いて分析され，消極的なプレー，不真面目なプレー，自分勝手なプレー，危険なプレーのサブカテゴリーからなる「選手のプレー」カテゴリーと，対自己，対他者（コーチ），対他者（コーチ以外）からなる「選手の姿勢」カテゴリーに分類された。「選手のプレー」と「選手の姿勢」に関わるカテゴリーに分類された。

(4)コーチの怒り喚起場面尺度の作成

検討の結果，6下位尺度（「無気力なプレー」，「自分勝手な言動」，「指示指導に対する不満の態度」，「物事に取り組む姿勢の欠如」，「消極的なプレー」，「規範意識の欠如」）18項目によるコーチの怒り喚起場面尺度が作成された。

(5)指導者の暴力行為の発生機序と予防因子の検討

検討の結果，怒りを喚起する場面状況の「自分勝手な言動」，「物事に取り組む姿勢の欠如」，失敗に対する態度の「失敗からの学習可能性」と怒りの表出方法である「理性的説得」と怒りを喚起する場面状況の「物事に取り組む姿勢の欠如」，「消極的なプレー」，体罰に対する態度の「体罰容認度」と怒りの表出方法の「感情的攻撃」に関連があることが示された。

(6)指導者の暴力行為の発生を防ぐアンガーマネジメントプログラムの開発とその評価

介入プログラムを2団体の指導者に対して実施した。プログラムの内容はアンガーマネジメントの目的，問題となる怒りのタイプ，怒り感情の概念的理解，怒り感情の表出メカニズム，非合理的信念の概念的理解，対人関係における認知の再構成の必要性，アンガーマネジメントにおける志向のコントロール，アンガーマネジメントにおける行動のコントロール，アンガーマネジ

メントの現場での適用とその効果，アンガーマネジメントの実践，であった。プログラムはアンガーマネジメントの知識を得ること，およびスキルを実践することから構成された。時間は90分間であった。また，自己理解を進めることを目的として，プログラムの実施前に2022年度に作成された6下位尺度からなるコーチの怒り喚起場面尺度に回答することを事前課題としてとて求めた。プログラムの効果を検証するためのデータ収集は，プログラム開始前，終了後，修了1か月後の3回実施された。データ解析までは完了しておらず，今後分析を進めて研究結果をまとめたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 洪倉崇行
2. 発表標題 コーチの怒り喚起場面尺度の作成
3. 学会等名 第34回日本コーチング学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 赤坂芳生・洪倉崇行
2. 発表標題 コーチの怒りの表出方法に影響を及ぼす要因の検討
3. 学会等名 九州スポーツ心理学会第36回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 赤坂芳生・洪倉崇行
2. 発表標題 コーチの怒り感情が発生する場面状況の特定：尺度作成に向けた項目収集
3. 学会等名 日本アプライドスポーツ科学会第1回学会大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------